おかっぱ

鷹見 怜

おかっぱ（前編）

　暑い夏の日でした。
　なぜかとってもいけないことをしたくなって、史香は学校とは反対の方角に歩き出しました。制服姿にカバンを持ったままで。
　制服は半袖のセーラー服でした。紺色の襟と袖に白い三本線が入っています。スカートはとっても短くしています。クラスの娘（こ）たちの間でもウエストで折り返して膝上 20 センチくらいのミニ丈にするのは当たり前ですが、史香は悪い娘なので、ちゃんと丈を切り詰めてそのまんま 30 センチ丈のミニスカートにして穿いています。落としたハンカチをちょっと屈んで拾ったりしようものなら、パンツが見えちゃう短さです。
　人けのない路地を史香は歩いて行きます。古い街なので料亭や町屋が並んでいます。どこも入り口はひっそりとしていて、格子戸の向こうは深々とした暗がりです。
　一本大きな通りに出ると、修学旅行の女子生徒たちが集団で歩いています。茶店の紅い緋毛氈を敷いた縁台に座ってわらび餅を食べてる娘たちもいます。史香はそんな娘たちの前をつぃーっと横切ってお寺の方へ向かいます。
　お寺の境内はひっそりしています。一般公開されていないから参拝客もおらず、中は静かそのものです。どうして史香がそこに入れたかって？　それは史香が悪い娘だからです。半月前には休館日の博物館にもぐり込んで男友達の山根君とオジロワシの剥製の下でいけないことをしましたし、つい先日も樫原さんの大学に呼ばれて夏の間使われていないボイラー室で大人の手ほどきを受けたりしてましたから、こんなふうにお寺に忍び込むことくらい御茶の子さいさいなのです。
　お寺の中は昼でも薄暗くて、ひんやりしています。外で日差しを浴びてかいた汗がひいていくのがわかります。史香は広い境内から中庭を抜けてお寺の裏側に回り込んでいきました。手洗い場の向こうに人目につかない離れがあります。恰好の場所を見つけたと思い、史香は男友達の一人のサキオ君を呼び出すことにしました。
　サキオ君に携帯で電話をかけていると、誰かが後ろにいるような気配がしました。振り返るとそこには頭をきれいに剃った女性のお坊さん（尼僧さんて言うのかな）が立っていました。史香は慌てて携帯をしまいましたが、尼僧さんは特に驚いた様子もなく黙って史香のほうを見ています。何か言い訳をしてこの場を逃げ出そうと思ったのですが、史香の体は射すくめられたように身動きできなくなっていました。
「こちらへいらっしゃい」
　尼僧さんは抑揚のない少し嗄れた声で言いました。頼りなさそうな細い声なのになぜだか逆らえないような厳しさがこもっていて、史香は尼僧さんの後を付いていきました。
　庭の敷石を踏んで先を行く尼僧さんは黒い法衣の上からも華奢な体つきであることが感じ取れました。剃り上げた後頭部からうなじにかけて薄っすらと汗ばんでいるのがわかります。ここで後ろを向いて走りだせば…と思うのですが、体が勝手に尼僧さんの後を付いて歩いて行ってしまうのです。
　離れの裏手に回ると浴室のようなところがあり、尼僧さんはそこの脱衣所に史香を連れて行きました。史香はなぜだか胸がドキドキして、息苦しくなるのを感じました。
「そこへ座って」
　史香は尼僧さんに言われるままに、ローファーを脱いで簀の子の上に座りました。正座です。プリーツの裾が持ち上がって、太ももがむき出しになりました。尼僧さんはちょっと軽蔑するような眼差しでじっと史香を見つめてから、

　ピシャッ！
と平手で史香の太ももを打ちました。肌の表面を切られるような鋭い痛みが走って、史香は思わず声を上げそうになりました。でも出てきたのは小さなうめき声でした。いつの間にか史香はほとんど声を発することができなくなっていたのです。
　尼僧さんに打たれた太ももは細い手のひらの形に赤くなっていました。痛みを堪えていると尼僧さんは史香の頭を軽く押さえて、前に下げさせました。
　前屈みになると肩より少し長い史香の髪の毛が太ももの上にバサッと落ちてかかりました。そのままじっとしていると頭に冷たい水の感触が走りました。尼僧さんが柄杓で史香の頭の上に水を注いでいたのです。
　水は微かに肉桂のような香りがして、普通の水とは違う不思議な力を持ったもののように感じられました。その水を浴びるとすっと頭が軽くなるような、目が冴えるような気がしました。
　尼僧さんは水を垂らして十分に湿らせた史香の髪を両手でぎゅっと絞りました。史香は髪に触られたくなかったのですが、逆らうことができませんでした。
　尼僧さんは髪の水気を切ると、史香の体を起こして正面を向かせました。水で濡れた太ももやスカートが気持ち悪かったのですが、どうすることもできません。そのまま史香の濡れた髪の毛を尼僧さんは櫛で丁寧に梳き下ろしました。少しウェーブをかけていたはずのサイドの髪が驚くほど真っ直ぐに垂れ落ちています。前髪だけは後ろに撫で付けられ、額がむき出しになりました。
　気がつくと両脇に二人の女官さんが座っていました。お正月に神社のおみくじ売り場にいる巫女さんのような、白い着物に赤い袴を身に付けています。お寺なのに女官さんがいるというのは不思議な感じですが、史香にはそのことについて考えを巡らせる余裕はありませんでした。
　女官さんたちは左右から史香の手首を軽く押さえました。そう強い力ではなかったのに、両腕とも動かすことができませんでした。尼僧さんは史香の額に人差し指と中指を合わせた二本の指先を当てました。指先から額に熱いものが伝わってきて、史香はなぜかひどく叱られているような気持ちになりました。
　尼僧さんは銀色に輝く裁ち鋏を取り出しました。それから後ろに向けて撫で付けたあった史香の前髪を前に向けて梳き下ろしました。鼻が隠れるくらい長い前髪で史香の視界は遮られました。
　両側から史香を押さえていた女官さんたちが少し後ろに下がり、史香の両腕は自由になりました。尼僧さんは史香の右手を開き、裁ち鋏を持たせました。
「切りなさい」
　尼僧さんが言いました。たぶん髪の毛を自分で切れと言っているのだろうと史香にもわかりました。史香は髪なんて全然切りたくなかったのに、自然に手が動いて裁ち鋏を顔の前で水平に構えました。銀色に輝く刃先が開き、それがそのまま鼻まで覆った史香の前髪に差し入れられました。

　さくっ、さくっ、と裁ち鋏の刃先が横に移動し、髪で覆われた視界が開けていきました。前髪を端まで切ってしまうと、尼僧さんは裁ち鋏を取り上げ、二本の指を水平にして眉上でまばらに垂れかかった前髪を撫でさすりました。史香は背筋がぞくっとしてここから逃げ出したいと思ったのですが、やはり体は動きませんでした。
　女官さんの一人が尼僧さんから裁ち鋏を受け取り、史香の前髪を切り始めました。眉上で切ったはずの前髪をさらにその数センチ上のところで切っているようでした。裁ち鋏はこめかみの深いところまで横一直線に史香の前髪を切り揃えていきました。額に微かに風が当たるのがわかります。ああ、こんなに短く切られてしまって…、そう思うと史香は自分がとても憐れな気分になりました。
　女官さんは前髪を切り終えると、もう一度元の位置に戻ってまた少し上の高さから前髪を切り始めました。前髪がまた短くなりました。その動作を女官さんは何度か繰り返し、その度に史香の前髪はよりいっそう短く切り揃えられていきました。額の半分よりもっと上、生え際の近くあたりまでいったときようやく裁ち鋏の動きは止まりました。
　鏡を見たわけではないのではっきりとはわかりませんが、史香は自分の前髪が恐ろしく短く切り揃えられてしまったことを感じました。
　それから女官さんは裁ち鋏をもう一人の女官さんに渡しました。尼僧さんは史香の前に立って目を閉じ、両手を合わせて無言で何かを祈っているように見えました。心の中でお経のようなものを唱えているのかもしれません。
　もう一人の女官さんは史香のサイドの髪に裁ち鋏を入れました。耳たぶが少し覗くくらいの高さでした。そのまま真っ直ぐ横一直線に後ろまで切り進んでいきました。そうして左右同じ長さに切り揃えると、再びもとの位置に戻ってさっきより少し上の高さでまた切り進んでいきました。そうやって前髪のときと同じように女官さんは何度かサイドの髪を切り揃えていきました。
　女官さんが裁ち鋏を置いたとき、史香は横も後ろもものすごく短く髪の毛を切られたことを感じ、再び自分がとても憐れな気分になりました。
　女官さんたちは水を入れた木桶と何か別な道具を持って史香の後ろに座りました。頭を少し前に倒され、冷たい金属の感触がうなじに当たりました。カタカタカタ…という音がして、短く切り揃えられた髪からはみ出した襟足の毛が刈られているのがわかりました。実物をちゃんと見ていないので確かなことは言えませんが、手動バリカンのようなものが襟足に当てられているようでした。
　バリカンの刃先は史香の後ろの髪を、切り揃えたサイドのラインのところまで（それはかなり高い位置にあるように感じられました）刈り上げていきました。バリカンは何度も何度も襟足に当てられ、裾の方はもう刈る髪がないのではと思われるくらい短く刈り込まれているようでした。
　女官さんはバリカンを置くと木桶の水に剃刀を浸して、史香の頭の後ろの、今刈り上げたばかりの部分を剃り始めました。ゾリッ、ゾリッと生々しい感触が頭皮から伝わってきました。バリカンで刈られた部分の髪は剃刀で全部剃り落とされてしまったようでした。
　女官さんたちが史香の後頭部の下半分を剃るのを終え道具を持って行ってしまうと、尼僧さんは静かに目を開き、再び柄杓の水を史香の頭のてっぺんからかけ始めました。
　水は頭頂部から何度も何度も注がれ、史香の髪も着ているセーラー服もスカートもびしょ濡れになってしまいました。流れる水で呼吸が苦しくなるほどでした。
「お願いです、もう許してください」そう言いたかったのですが、やはり声が出ませんでした。

ようやく水をかけられるのが止まると、史香は全身ぐっしょりと濡れて簀の子の上に正座していました。ずっと同じ姿勢でいたせいで脚がしびれて感覚がなくなっていました。
「立ちなさい」
尼僧さんに言われて史香はやっとの思いで立ち上がりました。体がグラグラ揺れて真っ直ぐ立っていることができません。尼僧さんはふらつく史香を連れて廊下を渡っていきました。
広いお寺の中を歩いているうちに少しずつ足の感覚が戻ってきました。髪も着ている服もびしょ濡れだったので廊下にポタポタと水が滴りました。
大きな仏像や蓮の花の飾りが置かれたお経を読み上げる場所に着くと、尼僧さんは仏像の前に座り、史香はその脇の木魚のそばに座らされました。
尼僧さんはお香を焚き、静かに読経を始めました。史香はよくわからないけれどこの場はそのほうが自然だと思い、両手を合わせて目を閉じました。
長い読経が終わり尼僧さんが立ち上がると史香も一緒に立って、朱塗りの柱の間を通って建物の玄関のところまで行きました。玄関のたたきの上には史香のローファーが揃えて置いてあり、それを履いて土間に降りました。広い玄関の壁には姿見があり、そこに映った姿を見て初めて史香は自分がどんな髪型になったのかを知ることができました。
前髪は額の生え際から数センチのところで横一直線に切り揃えられていました。今まで長い前髪で隠れていた額も眉もむき出しでした。サイドは耳の３分の２が見える高さで後ろまで一直線に切り揃えられ、そのラインから下の髪は見事なほどに青々と剃り上げられていました。襟足に触るとつるつるして奇妙な感触でした。濡れた髪も制服もほとんど乾いていましたが、一度水浸しになっていたので埃っぽいような気持ち悪い感じは残っていました。
尼僧さんは合掌して一礼すると「帰りなさい」と嗄れた声で言いました。史香はしばらくボーッとしていましたが、ようやく帰っていいのだと気づき、深々とお辞儀をして玄関から外へ出ました。
お寺の境内から山門をくぐって外へ出ると夏の西日が差し掛かっていました。古い通りには観光客や学校帰りの学生たち、夕餉の買い物途中の主婦、外回りの営業マン、何かの人夫さんたち、いろんな人たちが行き来していました。
史香は“こけし”のようにみっともないおかっぱ頭のまま、通りを歩いて行きました。すれ違う人たちが皆珍しそうに史香の頭を見つめます。極端に短く揃った前髪、つるつるに剃られた後頭部としわだらけの制服、バカみたいに短いスカート…。自分の格好のすべてが恥ずかしくてたまりませんでした。誰も何も言いませんでしたが、心の中で史香のふしだらで無様な姿を軽蔑するように見ているのは確かでした。いっそからかうなり、冷やかすなり、声に出してあざ笑われたほうがずっとましなような気がしました。
恥ずかしい…。
西日を浴びてつるつるの後頭部を汗で滲ませながら、家までの長い距離を歩いて帰りました。

★おわり

おかっぱ
http://p.booklog.jp/book/92482

著者：鷹見怜

著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/takamirei/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/92482

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/92482

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）

運営会社：株式会社ブクログ